

## 温州ミカンそうか病の生態と防除に関する研究 (第IV報) 新葉の発病におよぼす越冬病葉と降雨との関係

貞 松 光 男

(佐賀県果樹試験場)

SADAMATSU, M.

Ecological Studies on Unshiu Citrus Scab, and its Control.

(IV) Correlation of Overwintering Lesion and Rainfall to the Occurrence of the Disease on Leaves.

西南暖地の温州ミカンにおいては、そうか病が重要な病害の一つとなっている。本病の伝染源は越冬病斑に限られること、および感染は降雨時におこなわれるので両者の関係から、発生予察の資料をえようとするものである。

### 試験方法

1. 供試樹 普通温州(田中系)樹について越冬病葉率を調査し、発病の程度が甚からずまでむらなく含まれるよえに1区約10樹をえらんだ。試験区は無散布、展葉初期1回、落花時1回、および展葉初期、落花時2回のダイホルタン水和剤1000倍を散布する区をもうけた。

2. 発病調査 初発をみとめてから、ほぼ1週間～10日ごとに各樹から20～35本の新梢を任意にえらび、発病停止時まで発生予察要領にもとずき調査した。

3. 調査年次 昭和41～45年

### 結果と考察

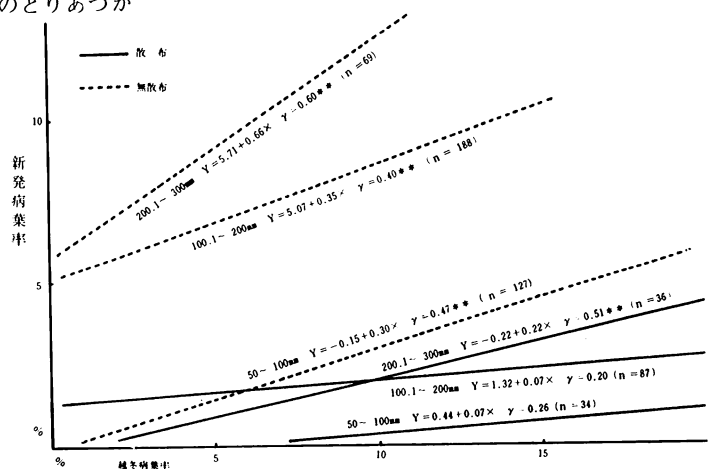
結果をとりまとめるに当り、降雨量のとりあつかいは、無散布区については、初発前7日からの日降水量5mm以上を、発病調査前7日まで集計した。これは潜伏期間を7日と仮定し、さらに5mm以下の降雨では感染がおこらないと仮定したものである。しかし、防除区にあっては、降雨による薬剤の流亡を考えねばならないので、散布後の全降雨量を発病調査前7日まで累計し、それぞれ新発病葉率との相関を求めた。

各年次ごとに、試験区ごとに新発病葉率を越冬病葉率と、それぞれの降雨量についてもとめると、無散布区においては両者間に相関関係がみられ、越冬病葉率が高ければ高いほど降雨量が多ければ多いほど、新発病が増大することが認められた。

薬剤散布区は散布後間近いか、降雨量が少ないときには相関関係が低いが、ある程度以上の降雨量になると相関関係が認められるようになった。

次に年次を考えないで降雨量を機械的にある範囲ごとに区切り相関を求めた。結果は第1図に示した。図にみられるように越冬病葉率をあらかじめ調査しておく、感染期間における降雨量から、新発病の程度をあらかじめ予測しうることがわかった。

なお、薬剤散布区は100～200mmの降雨では相関関係は低いが、200～300mmの範囲では相関が認められるようになり、薬剤の効果が200mm前後でできることを意味していると思われる。



第1図 降雨量ごとの回帰直線および回帰式